時代のうねり

先日の日曜日、十六日がイースター（復活祭）であったことを知らない人は意外に多いかもしれない。

イエスは十字架に架けられて殺されたが、神は三日後にイエスを復活させ、キリスト（救い主）とされる。そして我々もイエス同様に復活するという「復活信仰のキリスト教」にとって、イースターはそれを記念して祝う最も大切な日である。

しかし、同じキリスト教に由来するクリスマスが、どこまでその日の意味が理解されているかは別として、非キリスト教国の日本でもよく知られているのに比べ、イースターの認知度は低い。

クリスマスのように商業主義と結びついていない点と、イースターが毎年同じ日でないこともその一因かもしれない。

イースターは「春分の日」のあとに最初に迎える満月の次の日曜日で、今年は四月十六日であった。実は、私は今から五十二年前のイースターに徳山カトリック教会で結婚式を挙げたが、その年（昭和四十年）のイースターは四月十八日だった。

あれから五十年、半世紀が過ぎたのだ。

戦争などによる変化を別とすれば、半世紀にこれほどスピーディーに生活様式が変化し、いろんな価値観まで変わった五十年はないのではないか。時代のうねりを感じる。

結婚する前年の一九六四年に東京―新大阪間の東海道新幹線が開業、東京オリンピックが開催された。結婚した当初は市営住宅に住み、家に電話もなく、自家用車も持っていなかった。高度経済成長とともに月給も増えた。そして生活が大幅に豊かになったのは事実である。

結婚式を挙げた当時は、フランシスコ・サビエルが宣教した国として、ヨーロッパなどからの宣教師が多数来日し、女子修道会も日本独自に創立されたものを含め、シスターも大勢であった。今思うと、戦後の教会が最も元気なころだった。

ところが今はといえば、神父や修道女の高齢化が進み、亡くなられた宣教師も多く、女子修道院も閉鎖するところも出ている。

ある人は「世代交代」の時期というが、私はそうは思わない。交代する人がいないのだ。

司祭、修道女に限らず、教会信徒に若い人がいない。教会に限らず日本の社会全体が超高齢化社会を迎えようとしている。ここに大きな時代のうねりとともに人間は本当に幸せに向かっているのかと考えさせられる。

今は極めてわずかな期間にスピーディーに変化する。高齢者はそのスピードの速さ、価値観の変化についていけず、社会から取り残されつつあるように思える。

喜寿を過ぎ、自分自身も社会についていけず、何ともいえない不安な気持ちになることがある。それに追い打ちをかけるように、妻が先日転倒し、左手首を骨折した。二人とも後期高齢者。一挙に老々介護が現実味を帯びて来た。

この大きな時代のうねりの中で、超高齢化社会でどう生きるべきなのだろうか。人の幸せとは何なのだろうか。名ばかりとはいえ、一人の信仰者として、一日、一日を理屈ではなく自然体で感謝と喜びと賛美の中で生きているのかと自問する。

五十二年前、結婚披露宴のテーブルに飾られた君子蘭（ラン）。自然の営みは半世紀前と変わることなく、君子蘭はその花を咲かせている。

コンサバトリーに咲く君子蘭